

## 日本人よりも、日本人らしく

伊藤 亜紀

2001年11月、私は専任教員募集の面談のため、初めてICUを訪れた。当時の人文科学科長でいらっしゃった大西直樹先生が、緊張する私を温かく迎えてくださった。模擬授業と面接を済ませた私を、バスのロータリーまで見送ってくださったのが、リチャード・ウィルソン先生だった。しだいに濃さを増していく木々の葉の赤や黄色、そして先生の屈託のない笑顔——。これといったキャリアもない私は、自然に恵まれた美しいキャンパスにまた来られるとは考えていなかったが、この先生には、再びお目にかかることになるのではないか——そんな気がした。

ウィルソン先生の業績については、今さら多言を弄するまでもない。『尾形乾山—全作品とその系譜』（雄山閣出版、1992年）、『乾山焼入門』（雄山閣出版、1999年）は、現在に至ってもなお、乾山焼の最も信頼性の高い解説書である。そして2013年以降、この『キリスト教と文化』に掲載されてきた各号100頁を超える論考は、膨大な数の乾山焼の主題やモチーフ、詩句等をひとつひとつ丹念に解説したもので、公私にわたるパートナーである小笠原佐江子先生と共に歩まれた、研究者生活そのものであると言えるだろう。先生はかつて『文藝春秋』の「日本に惚れ込んだ研究者」と題したグラビアのなかで、乾山を「陶芸家というよりデザイナー。欧州文化にも共通するモダニズムを感じ」と評し、折に触れてその魅力を語ってこられた（2003年4月特別号。ちなみにその前頁には、ツベタナ・クリステワ先生がとりあげられている）。さらにICU構内、都内

各所の遺跡発掘にも関わり、数々の調査報告書を出されている。

教師としては、このライフワーク、そして遺跡に囲まれ、湯浅八郎記念館を学内に備えるICUという環境を存分に活かした授業をなさっていた。遺跡発掘実習、とりわけ陶芸の実習コースは人気があり、先生ご自身も、学生たちと一緒に轆轤を回し、作品を仕上げることを楽しんでいた。

ウィルソン先生のお人柄を最もよく知ることができる機会は、卒論発表会であったように思う。初めて先生と共に会を催したとき、その自由な空気に驚いた。学生たちが自分たちの研究について嬉々として語り（熱弁を振るうあまり、時間を大幅に超過することしばしば）、素朴な疑問を投げかけあい、休憩時間にお菓子を頬張る。小笠原先生お手製の特大おはぎが持ち込まれると、学生たちのあいだから、ひときわ大きな歓声があがる。そのようなお祭り状態に、目を細めるウィルソン先生の姿があった。考古学から浮世絵、焼物、そして現代美術や写真、アート・マネジメントまで、じつに幅広い分野の卒論のひとつひとつに的確なコメントやアドヴァイスを与える様は、まさに教育者の鑑であった。論文提出まで紆余曲折、七転八倒した学生に対しても、「よく出せました。おめでとう！」と声をかけ、その努力を称えていらしたものである。日常の授業においては、英語の得意でない学生たちにもわかりやすい口調で教えてくださったという（無意識に日本語で説明されることもしょっちゅうだったとか）。ゼミ生のなかには、大学院へ進み、現在、国内外の学芸員として活躍している者も多い。いずれも先生の熱意に打たれ、日本美術の面白さを海外に発信することに意義を感じた精鋭たちである。

もちろん芸術作品のみならず、ウィルソン先生は日本のあらゆる文物に愛情を注がれた。研究室にお伺いすれば、出てくるのはいつも日本茶である。人気店の梅干しやちりめんじゃこ、羊羹等々、美味しいものをたくさん教えていただいた。その愛が深すぎたためなのか（?）、毎年春先には花粉症に悩まされ、大きなマスクをつけて自転車漕ぐ先生をよくお見かけした。しかしなにより「日本」を感じさせるのは、先生の佇まいであ

る。私は先生が大きな声を出されたのを、一度も聞いたことがない。また、教員同士の集まりでも、黙ってにこにこと同僚の話に耳を傾けていらしたことが多かった。乾山焼のように、あるいは私が着任前に初めて先生に連れて行っていただいた泰山荘のように、自己主張をしない、穏やかで控えめな「古き良き日本」を体現される方なのである。先生よりも「和の心」をもつ人を、私は知らない。

これを書いている2018年10月、私は途方に暮れている。寂しいなどという単純なことばでは言いあらわしえないほどの、ある種の「恐怖感」に囚われる。それは私が教員として未熟な頃から今日に至るまで、どれだけ先生の存在に支えられてきたかということの証なのである。来春の授業登録日に、いつもの「また今学期もよろしく申し上げます」という挨拶ができないのだということが、どうしても信じられない。

ウィルソン先生が築きあげてきた美術・文化財学コースを背負っていかなければならないという責任が、日に日に私に重くのしかかる。が、それと同時に、さまざまな要職や雑務から解放される先生には、ぜひ単行本とかたちで乾山焼のご研究をまとめていただき、さらには新たな課題に取り組まれることを心から願っている。

秋も深まりつつある今、しきりと思い出されるのだ。17年前、初めて先生にお目にかかったときの、あの笑顔を。

